

開催地名	佐賀県唐津市
開催日時	令和5年12月2日（土） 13：30 ～ 15：00
開催場所	ボートレースからつ イベントホール
語り部	石川 弘子 （福島県いわき市）
参加者	市民、市職員 65 名
開催経緯	福島第一原子力発電所の事故の恐怖心から、市民に本市原子力災害避難計画を正しく理解していただけない現状の課題がある。 避難計画の実効性を高めるために、まずは原子力災害を正しく理解する機会を設けることが重要と考えており、語り部から災害体験談・教訓、避難誘導に関すること、避難所運営に関するものを講演いただき、原子力災害の体験談や教訓などを直接伺う機会を設け、市民の防災意識の向上を図りたい。
内容	（１）私が経験した東日本大震災 地震が止まった後、津波が来るという情報はつかんでいた。自分にも、大きな津波が来るから家に戻れと家族から電話があった。近所のおじいさん、おばあさんも集まっており、3mの津波が来るらしいからどうするかな？と話合っていた。でも、みんな本当に来るわけないと思っていた。実際の津波の高さは7.5mだった。坂道を上がりながらシャッターを切った。津波が来る、引く、海の底が見える、また来る、引く。津波がうねりとなる。何回も押し寄せる。津波の最中でも火災が起こった、ますます広がった、爆発音も聞こえた。3/12 朝6時過ぎ、朝になっても津波は来た。何度目の津波であったかわからない。避難出来そうな場所を探しながら町の中の様子を撮影した。地面が滑るのでつかまれる物につかまりながらシャッターを押した。 （災害発生当日から現在までの久之浜町の状況を写真、動画で紹介。） また、久ノ浜町は原発から30kmの所にある町であるため、避難所生活をする事となった。その後放射線量調査も必要だった。除染のため庭の土を掘り、木々を切る必要もあった。避難所生活は本当に大変だった。徐々に親せき・知人の家に身を寄せる人が増えていった。避難所で生活する人数が減っていった。しかし、だんだん親せきの家にも居づらくなった、心付けを渡し出費もかさんだ。 また県外にいては正しい情報が入ってこなかった。やっぱり避難所に帰ろう！そしてまた避難所に帰った。同じように戻ってくる人がたくさんおり、また避難所で生活する人数が増えていった。その後仮設住宅に移動することとなった。 （２）地震発生後の正しい行動（クイズ形式にて）

	・地震が来たときの行動は、まず机などの下頭や体を守り落ちついたら避難する。 ・スーパーで買い物中の場合も、買い物かごを被ってその場にうずくまり待機し落ちついたら避難する。 ・ブロック塀などのそばを歩いている時はブロック塀から離れる。 ・エレベータの中にいた場合は、すべてのボタンを押す。 ・大地震の時一番良い避難場所はガソリンスタンド。 ・地下にいる場合は慌てず様子を見る。(法律：70m 毎に非常口があるため) ・大雨で濡れている道路を集団で歩く場合、元気な人を先頭に高齢者や子供を真ん中に縦一列になってゆっくり歩く。その際杖になるもの(傘や棒など)を持って歩く。 ・足を挟まれている人を見つけた場合は、動かさずに助けを待つ。 ・避難袋の中身に必ず入れてほしいものは携帯トイレ1日分(5-7回分/1人)である。 (3) まとめ もしもの時にどう動くか、どう行動するか次の世代の人たちに伝えるため、考えることが大事だ。避難する場所は、日ごろから家族で話し合っておくことである。 また、被災後は消防や自衛隊の方の救助活動はもちろんであるが、家族や周辺住民が励ましあい助け合うことになるため、日ごろから周辺の方々とのコミュニケーションをとっておくことが重要である。災害後は様々な人が様々なことを言うてくるが、各自治体はガイドラインを作成しているため、噂話を信じるのではなく(情報が錯そうするため)、自治体の方の情報を信じる。また地域の避難訓練には必ず参加していただきたい。自分の命を大切にしてほしい。
開催地より	東日本大震災の映像等を使用し、津波の怖さや避難所生活について、災害発生から現在の復興状況までをご説明いただいた。 講演を受け、当市としては自主防災組織などによる自助意識の向上と原子力災害を想定した職員研修の実施に向けて取り組みを強化していきたい。